

応永二十七年七月二十日（1420 年 9 月 6 日）
常陸国河原子・相賀を襲った津波について

The tsunami of 6th September, 1420 which hit Kawarago and Aiga villages,
Ibaraki Prefecture

都司 嘉宣¹
Yoshinobu TSUJI¹

1. はじめに

武者（1940）の編纂した地震史料集である『増訂 大日本地震史料 第一巻』の p365 に、『神明鏡（しんめいかみ）』の記事が引用されており、そこに応永二十七年七月二十日に常陸国（茨城県）に津波が来襲した、という記載が見える。この津波を引き起こしたはずの地震の揺れに関しては、記されていない。この津波の独立記事は『神明鏡』の一件のみである。武者（1940）には『続本朝通鑑』の文章があげられているが、この記事は『神明鏡』の記事を不正確に引用した二次的な史料と判断され、独自性はない。

本稿では、第 2 節でこの津波を記載する唯一の史料である『神明鏡』の成立に関する書誌的な議論と、津波記事を含む前後の記事から、この記事の筆者の記載背景について考察する。

第 3 節では、津波の記事と、この時点での他の文献による地震記事を対比して、この津波に関する理学的な考察をしておこう。

第 4 節では、第 3 節までの考察によって、この津波が遠地津波であるらしいという見解に基づいて、この応永二十七年の津波に対して、南米大陸でそれに対応するような記録があるかどうかについて考察する。

2. 『神明鏡』について

『神明鏡』は上下 2 巻からなり、その全文は『続群書類聚』の第二十九巻上によって、活字本としてその全文を参照することができる。活字本にして全 80 ページ余にも及ぶ長文である。『神明鏡』の書誌的な解説については『群書類聚』に、藤井貞文氏によって述べられている。以下、これらに基づいて、『神明鏡』の文献としての性質を見ていこう。

『神明鏡』は、初代天皇である神武天皇から、後花園天皇（在位 1428 ~ 1464）までの年代記である。『群書解題』によると『神明鏡』は作者は不詳であるが、仏教説話がやや多いことから僧侶の手になったものと推定されると説明されている。南北朝時代の後円融天皇（1371 ~ 1382, 北朝）を「今上（現在の天皇）」と記した箇所があり、このころいったんは成立したと考えられる。そののち、幾度か別人による書き加えが行われたらしく、後花園天皇（1428 ~ 1464）を「今上」と記した記事のあと、永享六年（1434）正月の記載事項が最終記事となる。このため、応永二十七年（1420 年）の常陸国の津波の記事は、おそらく書き継ぎの最終筆者の生存中の事件の筆記とみられる。この津波記事がこの文の筆者にとって、はるか昔の伝承記事などではないため、信頼性は高いと考えられる。

次に、この文の筆者は、どこの土地に詳しい人であるのかを原文から見ておこう（図 1）。

図 1 は、応永二十七年（1420 年）の常陸

¹地震津波防災戦略研究所

¹Earthquake and Tsunami Disaster Prevention
Strategy Institute

云。同廿七年七月廿日。卯時ヨリ巳ノ時マテ瓦子相賀塩干事九度。魚多ク打上ラル。同八月十日。鎌倉大地震十七度。同十二日洪水入也。同廿九年閏十月十三日。佐竹上總入道常。蒙御不審ヲ。比企ノ谷法花堂ニテ自害。家人十三人討死。子息一人。同卅年五月廿八日。鎌倉殿小栗并眞壁御退治ノ爲ニ結城マテ進發。同八月二日小栗没落。眞壁同前。五日宇都宮御退治。同卅二年二月廿七日京都方御所御逝去。同月鹿島浦ニ鯨寄事數千疋ト云ヘリ。同九月八日鎌倉御所炎上。又八幡宮狐鳴。又今宮傍ニ天狗大木ヲ以テ家作ト云ヘリ。同卅三年正月十八日日光山々上大水出テ。坊共數ヶ所押流。御橋落河

図1 『神明鏡』の応永二十七年常陸津波が記載された文章（太傍線）と、それに続く 11 行の文章。地名が現れる記事に破線で傍線を添えてある。

津波を述べる 2 行の文章と、それに続く 11 行の文章である。この、それほど長くもない文章には、①鎌倉、②佐竹（茨城県中部）、③比企（埼玉県）、④眞壁（茨城県）、⑤宇都宮、⑥鹿島浦（茨城県）、⑦八幡宮（鎌倉）、⑧日光、と関東地方の地名が 8 個も出てきて、京都・奈良など近畿地方の地名は一つも出てこない。このことは、この文章の筆者が関東地方に住む人であることを明瞭に示している。

さらにこの日の二十日後の八月十日（1420 年 9 月 26 日）に起きた鎌倉での地震の記事として、同じ『神明鏡』に次の文章がある（図 1 参照）。

同（応永二十七年）八月十日、鎌倉大地震十七度。

この記事には、鎌倉で強い有感地震が十七度発生したと述べられている。この有感地震の回数をのべた記事は『神明鏡』の筆者が鎌倉の住人であることを示している。

『神明鏡』の筆者の居住地が鎌倉であることを示す事柄をもう一つ述べておこう。それは、応永 27 年（1420）の 13 年後の永享五年九月十六日（1433 年 11 月 7 日）の次の記事である。

大地震、鎌倉築地崩、極楽寺ノ塔ノ九輪落チ、惣シテ唐物共多損。大山ノ二王頸落

この文に出てくる極楽寺は鎌倉極楽寺坂にある真言律宗の著名の寺院である。大山は伊勢原市にある阿夫利大社である。この記事もまた、筆者が鎌倉の住人であることを示すものであろう。

これらのことから、応永二十七年の常陸国の津波の記事は、その筆者が生存中のできごとで、しかも関東地方（おそらく鎌倉）に在住していたことが明らかであるため、ほぼ一次史料に匹敵する信頼性の高い文章であることを示している。

3. 『神明鏡』の応永二十七年七月二十日の常陸国の津波記事

それでは、本稿の主題である常陸国で観察された応永二十七年七月二十日の津波記事を検討しよう。『神明鏡』の原文は次のようである。

〔神明鏡・原文〕

同（応永）廿七年七月廿日、卯刻ヨリ巳ノ時マテ瓦子相賀塩干事九度、魚多ク打上ラル

（現代語訳文），

応永二十七年七月二十日（1420年9月6日）の卯刻（午前6時）から巳刻（午前10時）まで、瓦子と相賀で、海の潮位が九回下がった。魚が多く打ち上げられた。

（解説）この文に出てくる瓦子は、現在茨城県日立市河原子町（36.5627°N, 140.6434°E）であって、JR 常磐線常陸多賀駅の南東 1.4km のところにある漁港町である。相賀は現在日立市相賀町（36.5812°N, 140.6601°E）であって、常磐線日立駅の南 1.0km のところあり、河原子町の 4.4km 北に位置する。河原子、相賀とも、日常的に風波の打ち寄せる太平洋の外洋に直接面した町であって、居住地の標高はともに 4m より高い位置にある。

卯刻（午前6時）から巳刻（午前10時）まで、4時間である。この間に9回の潮位の降下があったというのであるから、1回の潮位降下から次の潮位降下までは約30分の時間間隔で繰り返したことになる。

この津波によって、特に陸上の家屋や人命の被害は記載されていないので、居住地への浸水はなかったものと判断される。「魚が多数打ち上げられた」の記載から、この津波は全振幅 4m 程度、半振幅（≡浸水高）2m 程度の津波であったと判定される。

この津波が、日本列島近海で生じた津波であるならば、今村・飯田の津波規模階級は、 $m = 1$ 、と判定され、渡辺（1998）によると、この規模階級の津波を発生する地震規模は M7.0 前後であるとされる。この場合、少なくとも鎌倉を含む関東地方で、相当顕著な有感地震が感じられたはずである。しかしながら、この津波が常陸国で観察された応永二十七年七月二十日には、鎌倉をはじめとする関東地方のどこにも地震記録はないのである。すなわち、この津波の発生原因となつたはずの地震は、日本全体のどこでも感じられていなかったのである。

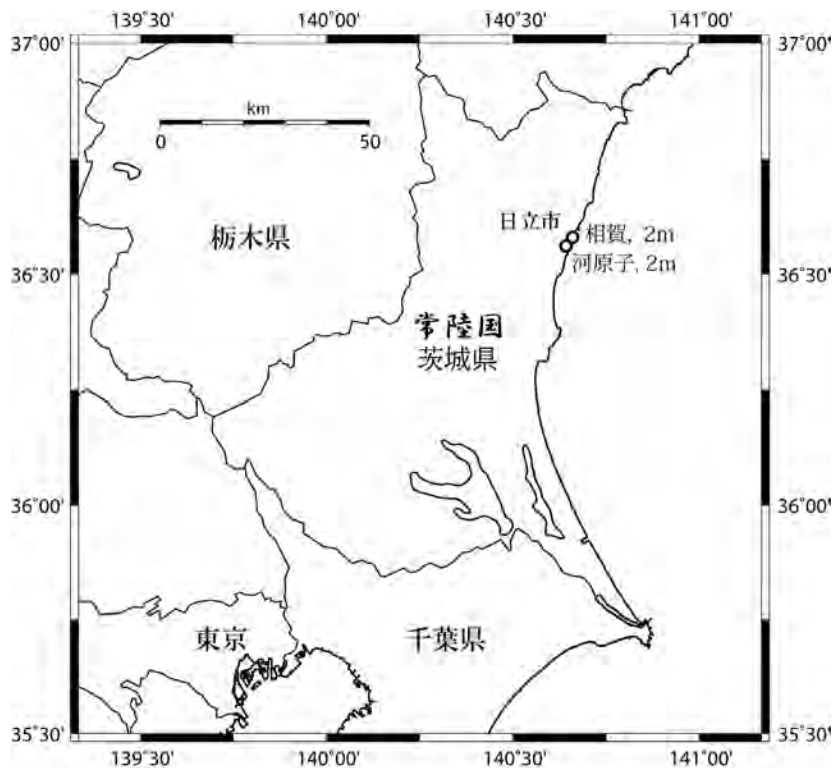


図2 常陸国河原子（瓦子），および相賀の位置

4. ペルー国原住民の伝承記録

前節までの議論で、本稿で取り上げた津波は、その原因となった地震記録が日本列島のどこにも見いだせないため、米大陸西部海岸で発生した地震による遠地津波ではないか、という疑問を生ずる。

渡辺 (1998) の津波カタログには南米大陸のペルーやチリの海岸で発生した津波が、我が国に影響を及ぼした 19 件の例が挙げられている。

筆者 (都司, 2025) は、近世 (1586 年から 1877 年まで) に、米大陸西岸に発生した地震により、我が国で遠地津波として記録を残した例が 8 件あることを論じ、日本側の記録の詳細について論じた。

また、筆者 (都司, 2026) は、永正九年八月四日 (1512 年 9 月 23 日) に徳島県安喰浦を襲った津波が、南米チリ国の伝承として語られていた地震に起因する遠地津波であったことを論じた。

それでは、本稿で論じた応永二十七年常陸国の津波に相当する南米側の記録はあるのだろうか？

南米海岸を含む太平洋東側の海域に発生した Soloviev ら (1975) の津波カタログのなかのチリ・ペルー・エクアドルの項目のもっとも古い年代の津波記録として、次の記事が掲載されている。英文で書かれた原文と、その日本語訳文を次に掲げておこう。

Peruvian Legends. Based on accounts of A. Herrere, who at the beginning of the XVII century had studied the history of the Peruvian Indians, a legend existed according to which there had been a huge flood, many years before the rule of the Incas, at a time when the country was very densely populated. **The ocean overflowed its boundaries, dry land was inundated,** and almost all the people were drowned. Indians of the Guacas tribe, who lived in Csauska Valley, and the aborigines of Chiquito in the province of Callao, related that despite the flood, some people had managed to survive in caves on the high

mountains and from them came the people who once again populated the country. The Indians of other mountain tribes maintained that, at the time of the flood everyone had perished except six persons, who had saved themselves on a raft, and it was they who became the progenitors of a new population (Ulloa, 1787; Lyell, 1868).

(日本語訳文)

ペルーの伝説。 17 世紀初頭にペルーの先住民の歴史を研究した A. ヘレーレの記述に基づく、インカ帝国の支配より多くの年月の前、先住民たちの国が非常に人口密度が高かった時代到大洪水があったという伝説が存在する。**海は境を越えて氾濫し、乾いた陸地は水没し、**ほとんどすべての人々が溺死した。チャウスカ渓谷に住んでいたグアカ族の先住民とカヤオ県のチキートの先住民は、洪水にもかかわらず、高山の洞窟で生き残った人々がおり、彼らから再びこの国に人々が住むようになったと語った。他の山岳部族の先住民は、洪水の時にいかに助かった 6 人を除いて全員が死に、彼らが新しい住民の祖先になったと主張した (ウジョア, 1787 年, ラリエル, 1868 年)。

(解説) この文で最も注目すべきは、「**海は境を越えて氾濫し、乾いた陸地は水没し**」の部分である。この「境 (boundaries)」とは「海と陸地との境」すなわち「海岸線」あるいは「汀線」のことである。この表現はこの現象が暴風雨による洪水ではなく、海水が陸地に侵入して来た津波であることを示している。

上文の登場する地名のうち Callao (カヤオ) はペルー国の首都 Lima の外港である。他の固有名詞単語の Guacas, Csauska, Chiquito (原義は「小さい」) については、地点を地図上に確定することはできなかった。

インカ帝国が成立するのは、13 世紀に成立したクスコ王国を母体としてパチャクテク皇帝が周辺部族を再編統合して 1438 年にインカ帝国として成立したとされている。したがって、上述の英文の 5 行目の “many years before the rule of the Incas” (インカ帝国の支配より多くの年月の前) とは、インカ帝国の



図3 南米 Peru 国と Callao 港、およびインカ帝国の首都であった Cusco の位置

支配が始まる西暦 1438 年から「多くの年月の前」と言っていることになる。日本の常陸国で記録された津波の年代、すなわち、応永二十七年（西暦 1420 年）はインカ帝国成立の 18 年前であるから、両者の年代はまず符合している、と判定することができるであろう。上の文に出てくる Callao とインカ帝国の首都であった Cusco の位置を図 3 に示しておく。

5. 結論

『神明鏡』に記された、応永二十七年(1420)七月二十日に茨城県日立市河原子、および相賀で記録された九回にわたる潮位の低下は、南米ペルー国 Callao で記録された、多くの人が犠牲となったと伝えられる、インカ帝国の支配が確立する 1438 年の「多数年の前」に起きた津波が遠地津波となって日本列島に

伝播したものである。この「多数年」は津波の年を 1420 年、インカ帝国が成立した 1438 年までの 18 年のことを言っていると理解することができる。

6. 謝辞

『神明鏡』の本文全文と、その書誌解題である『続群書類従』、および『群書解題』は、取手市立図書館にて閲覧することができた。同館の各位に感謝申し上げます。

参考文献

武者金吉, 1940, 『増訂 大日本地震史料 第一巻』, 文部省震災予防評議会, pp945
Soloviev S.L., and Ch.N. Go, 1975, Catalogue of tsunamis on the eastern shore of the Pacific Ocean, (English translated volume, by S. O. Wigen, Canada), Russia Science

Academy, pp285

都司嘉宣, 2025, 歴史時代に日本列島に來襲した南米海岸地震による遠地津波, 津波工学研究報告, 42, 37-68

都司嘉宣, 2026, 永正九年八月四日(1512年9月23日)徳島県宍喰浦を襲った大津波の発生原因, 津波工学研究報告,

43, (29-39)

宇佐美竜夫, 石井 寿, 今村隆正, 竹村雅之, 松浦律子, 2013, 『日本被害地震総覧』, 東京大学出版会, pp694

渡辺偉夫, 1998, 『日本被害津波総覧 第2版』, 東京大学出版会, pp238